

愛隣館研修センターニュース

〒612-8141 京都市伏見区向島二ノ丸町 151 Tel:075-621-3849 Fax:075-621-1579

E-mail:airinday@sunny.ocn.ne.jp http://www.airinkan.net 振替:01020-5-39321

編集発行所:社会福祉法人イエス団 愛隣館研修センター 発行責任者:平田 義

103号

みんなで一緒に「平和」をつくりだしましょ!

今の社会は「平和」なのでしょうか?ここ向島地域においても、非常に悲しいことではあるのですが、多様性を認めることなく排除、排斥を強行しようとする住民の圧倒的な力がうごめいています。このような地域社会は決して「平和」とは言えないでしょう。今号では真の意味での「平和」をつくりだすための働きについて特集しました。是非ご一読ください。

「被爆アオギリ二世」で繋ぐ 平和への思い

~向島にっこりフェスティバルにて~

向島5街区住人 矢吹文敏
(日本自立生活センター代表)

5月27日土曜日、お天気は暑いくらいの晴れ。私は、向島の街では毎年恒例の風景となっている「愛隣館 向島にっこりフェスティバル」の会場にいました。

何回かの実行委員会によって企画されてきたこの“みんなのお祭り”は、例年通り前日の夜には蛍が放たれ、当日には子どもたちによるメダカの放流が行われました。もちろん、焼きソバや串焼き、ホットドッグなどがお店に並んだことは言うまでもないのですが…、何と言っても最後の盛り上がりはビンゴゲーム。1枚100円のカードを20枚近くも買った人がいて、ビンゴ商品を何回も貰いに来るので、周りはびっくり! 番号を繰り出す人、番号を大きな声で読み上げる人、自分がねらっていた景品を先に取りられて悔しがる人。なんやかんやと賑やかな声が響きわたります。

ところで、そのビンゴゲームが始まる少し前の頃、愛隣館南側にある中央公園を中心とした所では、40人ほどの子どもたちによるウォークラリーが行われていました。大人の方から、向島の昔の話や中央公園の歴史な

どを学びながら、ぐるっと一回り。小さなメダカが入った容器を受け取り、「来年の今頃には大きくなってかなー?」と想像しながら、中央公園内の小川に放ちました。ほんの少しずつでも、この公園の自然が復活することを祈って…。



メダカ放流後、アオギリの説明を受ける子どもたち→

さて、今年はまだ一つのイベントがありました。少し長くなりますが読んで下さい……。

1945年8月6日午前8時16分。広島市の上空にアメリカの爆撃機が現れ、人類がこれまで体験したことのない恐ろしい殺傷能力を持った「原子爆弾」が投下されました。一瞬にして何万人という広島市民の命が奪われたのです。しかもその爆弾は、70年以上も経った今日の日まで、放射能被曝という後遺症による苦しみを広島市民に加えたのです。

私が今活動の場としている日本自立生活センター(京都市南区)の創設者の長橋さんは、自らが小児麻痺による障害者として生を全うした方ですが、「もしかしたら、この原爆は、最初の計画は京都に落とす予定だったと聞かされた。ということは、広島市民は京都市民の代わりに命を奪われてしまった。私たちが生きているのは彼らが身代わりになってくれ

たからだ。」と言い、また「この日の被爆で障害者になり、戦争の恐ろしさ、平和の大切さを語り部として伝えている沼田鈴子さんを、世界の障害者組織であるDPIの世界大会、さらに国連でも発言してもらいたい。」と周りの人に呼びかけ、カンパを募って沼田さんを世界大会に参加してもらうことが出来たのです。

その後沼田さんは、主に広島の中で語り部として活動する中で、「被爆アオギリを日本中に配ろう」という新たな活動を始めました。被爆アオギリというのは、73年前に被曝した際に、あらゆるものが焼けつくされて灰になってしまった中で、朽ち果てたと思っていたアオギリの木の根元から新たな芽が吹き出し、元気良く大きく育ち始めたものなのです。

沼田さんや広島市は、このアオギリを「被爆アオギリ2世」と名付け、平和を願う全国の多くの団体、学校や民間組織に株分け(苗木分け)を始めたのです。

植樹の様子↓



私は、この被爆アオギリを是非ともこの京都に分けてもらい、皆で平和を祈る拠点が造れないかと考えていました。10年ほど前にも別の団体と話し合っただのですが、結局は実現しませんでした。

しかし、新しいまちづくりに挑戦し、地域全

おまえは闘っている
 苦しいと叫ぶのではなく
 悲しいと泣くのもなく
 唯黙々と
 自分自身の命と闘っている
 おまえを助けてやりたい
 おまえをおまえの世界からひきずりだしたい
 しかし
 おまえの世界は
 お前にしか解らない
 おまえの命も
 おまえだけのものだ
 おまえに代わって
 おまえの命と闘うことは
 できない

体の幸せを願い、孤立や孤独、排除や排他ではなく、共に安全に安心して暮らせる向島にしようとして日夜活動している人たちがたくさんいらっしゃるこの地域で、このアオギリの木を育ててもらうことが素晴らしいのではないかと思うようになりました。

向島ニュータウンに引っ越してきてからまだ6, 7年しかたっていない私ですが、「安心安全ネット」の会議の皆さんが、この提案を本当に快く受けてくださいました。中央公園に詳しい山崎さんの実に手早い対応と、懐の深い福井さんや平田さんの大きな力を得て、被爆アオギリ2世の植樹は、子どもたちの協力も得て無事終わりました。

最初のイベントとしては、8月6日の広島原爆の日の朝に、一人でも多くの皆さんに来ていただき、手を合わせ、平和を祈り創るための集まりが出来ればいいなと思っています。もちろん、形式的なプログラムや演出は何も考えてはおりませんので、ささやかに思いをつなげれば嬉しいなと思うだけです。ほんの少しだけ大きくなった「被爆アオギリ2世」を皆さん見に来てください。

「平和」をつくる集会
8月6日(月)7:45~8:30
場所:中央公園被爆アオギリ2世前
 原爆犠牲者への追悼を祈り、平和への思いをつないでいく集会です。どうぞお越しくください。

柏木正行さんの
魂に触れる

おまえの世界

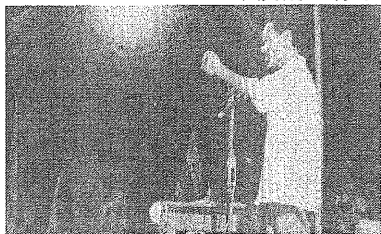
おまえの世界は小さい
 朝日のよく当る四人部屋の
 おれと向い合わせのベッド
 それがお前の全てだ
 おまえのはそこで三度の食事をし
 日に何回か排便する
 命の臭いをさせ
 命の音を立てる

「分断」を克服するには

“この瀬長一人が叫んだならば、50メートル先まで聞こえます。ここに集まった人々が声をそろえて叫んだならば、全那覇市民にまで聞こえます。沖縄70万人民が声をそろえて叫んだならば、太平洋の荒波を超えてワシントン政府を動かすことができます”

↓演説の様子

こう呼びかけ、人々の団結を訴えた瀬長亀次郎。戦後、アメリカ統治下の沖縄で、圧政に対して一貫して抵抗した彼の生き様を通して現在に連なる歴史を描き出す、映画『米軍(アメリカ)が最も恐れた男 その名は、カメジロー』。



この夏、愛隣館にて上映いたします。

激しい地上戦が展開され、県民の4人に1人が犠牲になったといわれる沖縄戦が終結。戦後、アメリカの統治下におかれた沖縄は、太平洋の要石として軍事基地の拡大強化が計られ、強制的に接収した土地を合法的に使用するために布令を発し、「銃剣とブルドーザー」で暴力的に土地を奪ってゆく。米軍支配の下、沖縄の人々の人権は無視され、米兵による凶悪な事件、事故が相次ぐ時代の中、県民の生活と権利を守るため、弾圧を恐れずに米軍に抵抗したのが亀次郎であった。

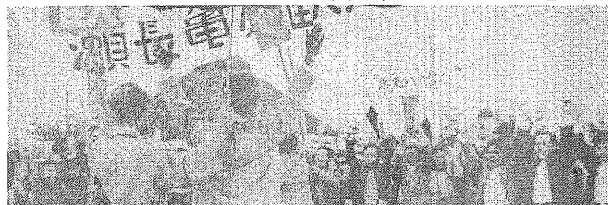
1952年、琉球政府設立において立法院議員となった亀次郎は、その創立式典で他の議員達がアメリカへの忠誠を宣誓する中、ただ一人それを拒否し、アメリカに対する抵抗を行動で示した。この出来事以降、アメリカにとって亀次郎は好ましからざる人物とされる。

1956年、那覇市長選挙において市民の支持を受け当選した亀次郎に対して、アメリカは様々な形で市政に干渉。しかし、彼を支持する市民らは市政を支えるために進んで納税し、瀬長市政を支えた。これに対し、アメリカは法改正をしてまで最終的に亀次郎を市長の座から引きずり下ろした。わずか11ヵ月余の在任期間であったが、亀次

なつやすみ平和映画上映会のご案内

郎の強い信念と不屈の精神は沖縄の人々に勇気を与え、その後も日本復帰と基地のない平和な島を求めて活動を続けてゆく。

↓民衆に迎えられる亀次郎



被支配者層の結束を分断することで支配者層への反乱を防いで統治しやすくする「分断統治」という手法は、植民地時代はもとより、古くはローマ帝国時代から使われてきた。日本の江戸時代における身分制度や、沖縄の戦後においても同様の手法が見てとれるだろう。

激しい沖縄戦の後も大地に深く根ざし、どんな嵐にも屈しないガジュマルの木が亀次郎は好きだった。ガジュマルの木は、幹からは何本もの気根が繁茂し、幾本もの気根が束になり、一本の大木となる。統治者により分断されることなく、ガジュマルの木の様に結束して抵抗してゆくことを訴えた亀次郎の精神は今に受け継がれている。

戦後から何も変わっていない過重な基地負担、基地があるが故におこる事件、事故の数々、強行的な新基地建設に対して沖縄の人々は声を上げ続けている。

分断は沖縄の中だけではない。沖縄と本土、大都市と地方、格差、貧困、偏見や差別、いのち等々。

「あなたなら、どうする？」
分断を克服するために出来ることは何か。亀次郎は私たちに問いかけている。(記:安野友喜)

なつやすみ平和映画上映会
「米軍が最も恐れた男
～その名はカメジロー～
8月11日(土)①10時②14時③18時
場所:愛隣館
上映協力券800円(当日1000円)

2018年4.5.6月の活動

- 4/2-7 お花見at伏見港公園
- 4/20 ウェルカムパーティー参加
- 5/26 ホタルの夕べ 今年も自生ホタルが!
- 5/27 向島にっこりフェスティバル

- 6/15 同志社女子高校花の日訪問
- 6/15 医療的ケア学習会(蘇生バッグ編)
- 6/22-26 イエス団沖縄平和研修
- 6/24 向島元気バザール参加

『語らい』の時を大切に

よく子どもが親に言われたりするセリフのひとつに「文句、言うな」というのがある。頭ごなしに問答無用なこのセリフ。何かに不満があってそれを申し出たところ、お前は経験も浅く道理というものはまだまだわかっておらん。ついでには経験もあり多少の酸いも甘いも味わった私が愛するお前のためを想ってこそ、敢えてそうするのだから我慢してそのようにせよ。と、子どもにとっては口を尖らせ「ほらまた、どうせ」と絶望的になるセリフのひとつである。しかしここ“問答無用”には親としての責任感、愛情がある。側で聞いていると微笑ましくすらある。

ところがこれが親子でなくて、社会一般的に親しくない大人同士となると状況は変わってくるのである。社会的ルールや常識に則った上で双方にとって大きな損得の偏りがなく、不満のある方も納得できる形で解決を目指す。どうやって目指す？ 納得解決。押したり引いたりギットリ汗かいて話し合うのである。お互い納得いくまで何時間も何日も何ヶ月、いや何年だって。やがて油でギットリした笑顔のオッサン二人が手を取り合って涼しげな花畑をスキップして一件落着。と、これは最高の着地点に

永江孝志

着地できた場合。というか、不満文句を申し出たからこそ始まり、解決まで辿り着いたのであり、話を起こさないとどうなる？ 不満を抱えた不安定な心のまま続くのである。何が？ そんな日々がずっと続くのである。といっても以外に不満を申し出るのは勇気がある。影響のない範囲でジクジクと漏らすか、テレビの街頭インタビューで舞い上がって初めて人に言ってしまうか、ぐらい。言うか言うまいか。もうそこから始まっているのである。言うことから不満不安解決が始まるのである。とはいっても何から始めればよからうか？

まずは言いたい事を何でも話せる環境を目指したい。と、いうことで愛隣館では毎月1回、テーマに沿って利用者さんスタッフを交えて語り合う活動『語らい』を行っているの
 である。いいな
 あ、秘密もい
 いけど何でも
 話せるのは。
 そんな大人に
 私はなりたい。

語らいの風景→



2018年 夏期献金のお願い

皆様方のご理解とご支援によって支えられ、活動を続けられますこと、心より感謝します。今年度も夏期献金にご協力頂きますよう、お願いを申し上げます。

《夏期献金・要項》

目的：障がい児・者とその家族とが地域で安心して暮らすことができる為に
 愛隣館研修センターの今後の活動を支援する

目標金額：3,000,000円

郵便振替：01020-5-39321

口座名：社会福祉法人イエス団愛隣館研修センター

★お知らせ★

▽愛隣館研修センターは、8月13日まで休館日とさせていただきます。

★編集後記★

▽103号のご意見・感想をお聴かせ下さい。(さ)

▼今号は「平和」をつくりだすをテーマにした▽核兵器による「ヒロシマ」「ナガサキ」の被害はどこまでこどもらに伝わっているんだろう▽「被爆アオギリ二世」を子どもたちと植樹した▽その「平和」の思いを繋いでいって欲しい▽沖縄では、戦争のための新しい辺野古新基地の建設の準備が進んでる▽過去の歴史に学ぶことを忘れたのだからか▽平和をつくりだしたい人々の思いを結集させなければならぬ▽切羽詰まった状況にある▽「原爆を落とす罪は重い」とさせた国の罪は重い」という阿波根昌鴻さんの言葉が心に響く▽今私たちが問われている(ひ)